



20th CENTURY

20世紀の文学
世界文学全集

28

エレンブルグ
フリオ・フレニトの遍歴
カターエフ
孤帆は白む

集英社

©本書は日ソ翻訳出版懇話会を通じて、メジ・クニーガ
(全ソ図書公団)の了解を得て、翻訳したものである。

© 1965 Shueisha



世界文学全集

28

エレンブルグ・カタージェフ

昭和四十年七月二十八日 印刷

昭和四十年八月二十八日 発行

訳者 米川正夫・工藤精一郎

発行者 陶山 巖

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

本文用紙 日本パルプ工業株式会社

表紙 東洋クロス株式会社

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話(265)六一一(代表)

振替 東京一五六五三

定価 五二〇円(落丁・乱丁本は本社で
お取りかえいたします)

目次

エレンブルグ

フリオ・フレニトの遍歴

カターエフ

孤帆は白む

証人エレンブルグ

工藤精一郎訳 三

米川正夫訳 三二

埴谷雄高 四八

フリオ・フレニトの遍歴

序 章

わたしは極度の興奮につつまれながら、自分の内容にとほしい生活の目的と釈明になるはずの作品、つまり師フリオ・フレニトの生活と思想の記述にとりかかろうとしている。その意気こんではみたが、まず、変幻きわまりない無数のできごとと圧倒されて、わたしの記憶は萎縮してしまった。もっともこれは、ろくにものを食べていない、わけても糖分の欠如のせいでもあった。師の説話や考察の多くが、わたしと世界のために永久に失われてしまうと思うと、わたしはおそろしくなる。しかし、師の形象は生き生きとして、鮮明である。かれはわたしの目のまえに立っている。やせて、かみつきそのような顔をして、オレンジ色のチョッキを着て、みどり色のポツポツのついたあの忘れられぬネクタイをしめて、音のないうす笑いをうかべている。師よ、わたしはあなたを裏切らぬ！わたしはまだときどき情性で生半可な詩を書いて、職業はときかれると、恥ずかしげもなく「文学者」と答える。だがこれは、習慣からそういつてるだけで、実際には、もうとくに愛想をつかし、これほど非生産的な時間消費方法は袖にしまっている。だれかこの本を多少とも興味をねらった小説であると受けとるものがあつたとしたら、わたしとして

は、実に遺憾である。それはつまり、一九二一年三月十二日といういたましい日、つまり師の死亡した日に、わたしに課された使命を履行できなかったことを意味するからである。わたしのことは、かれの毛深い手のようにあたたかで、タバコと汗のおいのしみこんだかれのチョッキ、小さなアイシャがとりすがって泣くのが好きだったあのチョッキのように、飾らない、心おきないもので、さらにまた顔面がいれんの発作のさいのかれの唇のように、苦痛と怒りにふるえるものであつてはしいと思う！

フリオ・フレニトは一度としてだれにもなにも教えたことはなかったが、わたしはかんとんに、いっそなれなれしく《師》と呼ぶことにする。かれにはいかなる宗教の教義も、道徳律もなかったし、ごく素朴な古びた哲学体系さえもなかった。さらにいえば、乞食で偉人のかれは、平凡な市民のささやかな定収をもたなかった——かれは信念のない人間であつた。かれに比べたら、どんな議員でも思想堅固の模範に見えるであろうし、どんな知事でも——誠実の権化（ごんけ）に見えるであろう。倫理と法のいっさいの現行規範の禁ずるところを破壊しながら、フリオ・フレニトはなんらかの新しい宗教とか、新しい世界観によってそれを弁明しようとしなかった。ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国の革命裁判所や、中央アフリカの祭司や道士をふくむ、世界のすべての法廷のまえに、師は背信者、欺瞞者、無数の犯罪の元凶として立つこと

であろう。なぜなら、裁判官たちでなくて、だれがこの世の組織やめばりをまもる番犬にならねばならぬのだ？

フリオ・フレニトは現実を憎悪することをおしえた。そしてその憎悪を強烈なものにするために、完全にどぎもをぬかれたわたしたちのまえに、偉大なそして避けられぬ明日への扉を開けてくれた。かれの所業を知って、多くの人びとは、かれは煽動者にすぎなかったというであろう。かれの存命中に、賢明な哲学者や陽気なジャーナリストたちは、そう名づけた。だが師は、この光榮あるあだ名を返上しようともせず、かれらにいったものである。「煽動者とは——歴史の偉大なる産婆だ。もし諸君がこのわたし、つまりおだやかな微笑をうかべ、ポケットに万年筆をもった煽動者をしりぞけたら、他の者がきて帝王切開をやらかし、世の中はもっとわるくなるだろう」

しかし現代の人びとは、この宗教をもたぬ義人、哲学科に学ばなかった賢人、囚人服を着た苦行者を受けいれようとしていないし、また受けいれることもできない。なんのために師はわたしにその生活を書くことを命じたのか？ フランスのチーズのように長持ちする古めかしい叙知^{くち}をだいににしまいこみ、机上にトルストイを飾った書齋にぬくぬくとおさまっている、誠実な知識人たち、つまりこの本の仮想読者たちを考えて、わたしはながいこと疑惑に苦しめられた。だが今回は狡猾な記憶がわたしを救った。わたしは、師がもみじの種子

を示して、わたしにこういったのを思い出したのである。「きみのほうが正しい。この種子は空間ばかりでなく、時間へもとんでいくよ」というわけで、わたしがこの本を書くのは、精神界に君臨する人びとのためでもなく、一部の、実を結ぶ力のない、亡びることを約束された人びとのためでもない。未来の下づみの人びとのためである。かわった鋤で掘りかえされた土地、その上でかれの子供たちや、わたしの兄弟たちがしあわせなばかとなってピョンピョンおどりまわる土地のためである。

一九二一年

イリヤ・エレンブルグ

第一章

わたしとフリオ・フレニトとの出会い——
悪魔とオランダのバイブ

一九一三年三月二十六日のことである。わたしは、例によって、モンパルナス通りのカフェ《ロトンド》^{*}で、もうとくに空^{そら}になったコーヒー茶碗をまえにして、だれかがあらわれて、しんほう強い給仕に六スウを払ってわたしを解放してくれるのを、あてもなく待っていた。この飲食法はまだ冬の

うちからわたしによって発明されたもので、みごとにその成果が実証されていた。事実、ほとんどいいにくい、閉店十五分まえに思いがけぬ解放者があらわれるのだ。それは——その詩をわたしはロシア語に訳してやったフランスの女流詩人であることもあったし、どういうわけかわたしに頼んで《シチューキン家の御曹子たちの一人に》作品を売りつけようとあてにしているアルゼンチンの彫刻家であったり、サン・セバスチャンでわたしの伯父をペテンにかけてかなりの金額をまきあげ、明らかに良心の苛責を感じているらしい、国籍不明のイカサマ賭博師であったり、また意外にも、わたしのもとの乳母だったこともあった。乳母は旦那方のおともでパリへきて、おそらく巡査がうっかりしてアドレスをよく見なかったらしく、ダーリ街のロシア教会をおしえるところを、ロシアのごろつきどもがとごろを巻いているカフェをおしえてしまったのである。この乳母の場合は、おきまりの六スウのほかに、大きな白パンをめぐんで、感きわまつて、わたしの鼻の頭に三度接吻した。

あるいは、こうしたい思いがけぬ救いの結果か、あるいは他ののもろもろの事情、たとえば慢性的な飢えとか、レオン・プロワの著作への傾倒とか、数々の失恋とか、そうしたことの影響のせいとか、わたしはすっかり神秘主義にかたむき、ごくつまらない現象にも至上の意志のなんらかのしるしを見るようになっていた。まわりの小店——食料品店や青果店——が地

獄の出店のように思われ、高いつけまげをゆい、口ひげをはやしたパン屋のおかみが、六十ほどの親切な老婆なのに、——恥知らずの青二才に見えた。わたしはアペリチフ(酒食前)を飲むやつらを片っぱしから各広場広場で公開火刑に処するために三万人の異端審問官をパリに呼ぶプランを詳細に作成した。次いでアブサンを一杯あおって、酩酊し、聖なるテレザの詩を朗唱し、もうすっかり慣れつつこの居酒屋の亭主に、ノストラダムス(十六世紀フランスの占星学者。ナポレオンの没落やフランス大革命まで予言したといわれる。)がすでに《ロトンド》が猛毒をもつむか、で、どもの温床となることを予言したことを、くだくだと証明し、夜更けにサン・ジェルマン・デ・プレ寺院の鑄鉄の扉をむなしくたたいたのだった。わたしの毎日はフランス女の愛人のところで終わるのが常だった。彼女は相当の経歴をもつ、気のいいカトリック信者で、わたしはもっともふさわしからぬ瞬間に、七つの《永劫の罰を受くべき大罪》と七つの《大罪》がどうちがうか、説明をもとめたりするのだった。こうしてすこしずつ時間がすぎていった。

あの記念すべき夜、わたしはカフェのうすぐらい片隅に、酒の気もなく、われながらおとなしくすわっていた。わたしのとなりでは、脂肪ぶとりのスペイン人が、素っ裸でふう息をはずまし、その膝の上で、これも裸で、つばの広い帽子で顔をかくし、金メッキのサンダルをつっかけた、胸のうすっぺらなごつごつした娘が、べちゃくちゃしゃべって

た。まわりでは雑多な連中が、多かれ少なかれ着ているものをぬいで、あかぎ酒やカルバドスを飲んでいた。《ロトンド》ではもうすこしも珍しくないこの光景は、《ネオ・スカンジナヴィア・アカデミー》ふうにながれわたった夜と説明されていた。しかしわたしには、むしろ、こうしたいっさいの光景が、わたしに対してむけられたサタンの軍隊の決定的動員であるような気がしていた。それでわたしは、まるで水泳でもしているように、ごそごそ身体をうごかして、汗くさいスペイン人、とくにわたしのまえにつきつけられたモデル女のボリュームゆたかな大腿から、身をまもろうともがいた。わたしはカフエじゅうへ目を走らせてパン売りの婆さんか、あるいはその代わりになれるだれか、つまりこの醜怪な劇の教唆者である大元帥の姿をもとめたが、むなしかった。

カフエのドアが開いて、山高帽をかぶり、灰色のゴム張りマントを着た、ごくあたりまえのひとりの男がゆっくり入ってきた。《ロトンド》へくる客は、外国人か、画家か、ただの浮浪人、つまり服装のまともでない連中にかぎられていた。だから、にわたりの羽根を頭につけたインド人も、わたしの友人で、砂色のシルク・ハットをかぶったミュージック・ホールのドラムたたきも、白と黒の混血娘で、男ものの派手な学生帽をかぶった小柄なモデルも、客の注意をひかなかった。ところが山高帽の男はあまりにもとびだつたので、《ロトンド》じゅうがぎょつとして、いっしゅんしずまりか

えり、やがてそこに驚きと不安のさきやきがひろまった。わたしだけはとくにすべてを見てとつた。たしかに、謎めいた山高帽の、さらにだぶだぶの灰色マントの完全に明白な使命を見ぬくには、この来訪者をしきりに観察すれば足りた。こめかみの上、ちぢれ髪の下に、けわしい小さな角がはつきりと突き出していたし、マントは勇ましくピンとはねあがった、とがったしっぽをかくそうと、むなしい努力をしていた。

わたしは、たたかいが目的のないものであることを知っていた。そして破局にそなえる心がまえをした。ちぎれ雲のように遠い思い出がわたしの頭にうかんだ——樹脂のにおいの強いモスクワ郊外の別荘、さくら色に上気して、心細そうに子供風呂に入っているわたし、女学生のナージャといっしょにズボフスキー通りを散歩したこと、木犀草のにおう、シェンの崖の上の夕暮れなど。しかしこれらの甘いまぼろしは、いばりかえった、どうにも防ぎようのないしっぽによって追いはらわれた。

わたしは早急な制裁、嘲笑を待った。あるいは伝統的な爪によるそれかもしれないし、あるいはまた、もっと簡単に、タクシーへ同乗の高圧的な招待かもしれない。だが、迫害者はまれにみる忍耐力をあらわした。かれはとなりのテーブルにすわると、わたしの方を見向きもせず、夕刊をひろげた。やがて、かれはこちを振り向いて、口を開きかけた。わたし

は立ちあがった。ところが、それから起こったのはまったく思いがけぬことだった。かれはひくい、むしろけだるそうにさえきこえる声で、給仕を呼び、「ビールを一杯!」と命じたのである。そして一分後にかれのテーブルの上に細長いジョッキが泡をふいていた。悪魔がビールを飲む! これにはもうがまんがでしなかつた。わたしはいんぎんに、しかし興奮をおさえかねて、かれにいった。「あなたは待っておいでようだが、それには及ばん。わたしは用意ができて。これがわたしのパスポート、うすっぺらな詩集が一冊、これがわたしの心と身体の二枚の写真だ。むろん、車で行くことになるでしょうな?……」くりかえしているが、わたしはこの悪魔が冷血動物であることを、とっさに見てとったので、自分の死にかかわる話を、まるでひとつとごとのように、平然と事務的に語ろうとつとめた。

いま、わたしにとってはダマスクへの道となったこの遠い夜を回想しながら、わたしは師の炯眼けんがんのまに深く頭を垂れるのである。わたしにわけのわからぬことをいわれて、フリオ・フレニットはあわてるでもなければ、給仕を呼ぶでもなく、立ち去りもしなかつた——いや、わたしの目を見ながら、しづかにこういっただのである。「わたしは、あなたがわたしをだれと思いがいをしているのか、知っています。が、その男はいません」このことは、わたしの神経病の治療を担当した医師の月並みな教訓とさしてちがわないものであつた。

だが、それでもわたしには、思いがけぬいまわしい発見のように思われた。わたしの整然たる棲居がすべてくずれ去った。なぜなら、悪魔をはなれては、『ロトンド』も、わたしも、どこかに存在した善も、いっさいが考えられなかつたからである。わたしは自分が破壊してゆくを感じて、最後の救いの環につかまつた。「だが、しっぽは、しっぽは?……」フレニットはうす笑いをうかべた。「しっぽなんかないさ——カラマーゾフ流のデンマークのしっぽも、とがたしっぽも、なんのしっぽもない。しっぽのない生活をするようにつとめることだ。おや、あなたもパイプ党ですな。わたしもです。すばらしいコレクションをもっていますよ。ヒースの古木でつくった英国の『スリーB』もあるし、ハンガリーのさくらの木でつくったのもあるし、レヴァンテの赤い陶土の首にジャスミンの吸い口をつけたトルコのパイプもあるし、オランダの……」わたしはがまんができず、最後の望みをかけて左の方へ折りまげられたしっぽをにらみながら、ひくくうめいた。するとフレニットはマントをひらいて、ズボンの横ポケットから、みごとなやつやのでた長いオランダ製のパイプをとり出した。もはや望みをかけるなものもなかつた。しっぽがとたんに消えてしまったからである。さらに、フレニットは山高帽をぬいだ、すると角と思われていたものが、ニグロのそのようにごわごわの濃い巻き毛であることがわかつた。わたしはへとへとに疲れ、おびえた目で、この偶然の

欺瞞者をみつめた、が、フレニトは平然とパイプをくゆらし
ていた。

わたしは、敵のいないことを、つまりそれはわたしのらち
もない妄想にすぎなかったことを、けっして喜ばなかった。
それどころか、悪魔といっしょにわたしの居心地よい場所が
すっかり消え失せてしまったのである。それは地獄にせよ、
やはり住める、わかる、感じられる世界だった。わたしは砂
漠にいるような気がして、流砂のなかになにかつかまるもの
を見つけようとして、フレニトに訊いた。「まあいいさ、し
っぽはないでしょう。でも、なにかあるはずじゃないか？……」
フレニトは歯を見せて、またニヤリと笑った。その歯がな
めらかで真白なので、わたしは思わず《歯磨き粉はデントー
ルを》という電車の宙吊り広告を思い出したほどだった。そ
して彼ははいねいに、まるであやまるように、「いいえ」と
答えた。その「いいえ」は、マツチをお持ちでしょうかとか、
《コメディア》紙の最新版を読みましたかとか、訊かれたと
きの返事のようにあった。

「でも、これはみななにかに立脚してるはずじゃないか？
なにかのかがこのスペイン人をあやつってるはずだ？ そこ
に意味があるはずだ？……」——「このスペイン人は三十年
ほどまえに生まれた。赤裸だったか、やがて毛につつまれ
た。舞台装置家などいってるが、実は相場師だ。今日は四
十リイもうけて、ごきげんだ。胃は正常にはたらいっている。他

の器官も同じだ。いま晩飯を食べて（ブドウ酒をこめて三フ
ラン）、女を買った（五フラン）。やがて相場で二十リイ損す
る。それから痛風にかかり、安酒を飲むようになる。そして
死に、くさり、墓に《名も知らぬ雑草》が生える。むろん、
このなかにひそかな目的とかくされた意義を発見するという
満足を、無償であなたにあたえられる」——「うそだ」わた
しはがまんができず、叫んだ、「そんなものはあるはずがな
い！ あなたはしっぽがない、が、あなたが——しっぽそのも
のだ！ 善というものがある、わかりますか？——永遠の、
絶対の！」フレニトはあわてなかった、声を高めもしなかつ
た。「たしかに、わたしは悪魔じゃない。あなたはわたしを
買いかぶりすぎる。ついでだが、そうした魅惑的な存在は、
残念ながら、ないよ！ 安心してねていいよ、まあ臭素をか
ぐまでもない。だが、善もないよ。そんなものは絵空事さ。
妄想だよ。退屈だから考えだしたんだ。悪魔がなけりゃい
たいどんな神があるんだね！ 《善》と言いましたね？ じ
ゃ、ほらこの娘さんをごらんさない。彼女は今日まだ食事を
していない。あなたもそうだが、食べたい、さじをなめた
い、が、ねだるのもまずい——甘ったるい、ねばっこいリキ
ュールをつきあわにゃならん。胸がむかむかする。あのスペ
イン人も吐き気がするほどいやだ。彼のつめたい、ねとねとの
手が身体をはいまわり、なでさする。彼女には子供がいる——
田舎のばあさんにあずけてある。月に百フラン払わなけり

やならない。今日はがきがきた——子供が病氣になって、医者、薬云々といってきた。はたらかなくちゃ。また笑顔を——
くって、舞踏会へ、どうぞ、それも乙女マルゴじゃなく、カルタゴのサランボーになって。スペイン人のなめくじみたいな唇に接吻するがいい、自分が欲情に狂ったように、すばやく、たてつづけに、——そしたら、もう二十スウはずむかしれぬ。要するに、日常さ、たわごとだよ、雑報だよ。ところであなたのいう神聖とか神秘とかいうものは、こうしたたわごとから逆さまに飛んで行くのさ。そりゃむろん、善とか悪とかいうものはすべてグラフで類別されている。ただちっぽけなまちがいが出ただけさ、ささやかな思いちがいがね。

公正？　じゃどうしてあなたは亭主をもちよつと利口にしたてて、この別荘にこんな醜態が生まれないようにしなかったのかね？　それとも、もしかしたら、悪は——《試練》《贖罪》である、信じておられるのかな？　としたら、それこそぜんぜん青臭くないことの青臭い弁明ですよ。あれはつまり彼があの娘をためしてるわけですか？　へえ、なるほど、好き者め！　ただどうしてやつはスペイン女をためさないのでかね？　あの目方じゃ秤りにかからんぜ。あの世で？　そう、そうかい！　で、そのあの世とやらはどこにあるんだね？　どんな地図にのっとるかね？　いまのところは《霊》は——抽象概念だが、死んだら、手足がにおって、やがて骨になり、粉になり、とんでしまふさ」

わたしはこれらのことばにおしひしがれて、黙りこくっていた。すると不意に無意味な渦巻く混沌のなかから一つの点、小さな黒い点のはじき出た。わたしは急いでそれにしがみついた。「そんなら、創造主も、意味も、善も、正義もないでしょう。だが、無がある。で、無があるとすれば、それはつまり、実質があるわけだ、意味があり、霊があり、創造主があるわけだ」——「それはあなた、あなたのまちがいだ。だって、あなたのいう《無》にだってやはりしっぽがないじゃないか。いいかね、パイプがここにある、わたしもここにいる、スペイン人もここにいる。ここに、すべてが存在し、その背後にはなにも存在しない、というからくりのすべてがあるんだよ。いまジャンじいさんが死にかけている、そして小さなジャン坊主がはじめてパイパイ泣いている。雨がさっき降ってたが、もうあがった。まわっている、ぐるぐると、これがすべてだよ……」

「だってそんな生活ってないじゃないか。それは醜悪だよ、恥辱だよ、それより、ずばりいえは不必要だ！」——「どうしようもないさ——あなたが選んだわけじゃない！　あなたはできあがった事実のまえに置かれたんだ。家具つきの家だよ。ひどく気に入って、居心地のいい者もいるだろうし、いやがって、とりあえずおだやかに壁の額を移す者もいるだろう……」

その瞬間すばらしい、同時に単純な考えがひらめいた。わ

たしはそれがフレニトから出たもので、わたしにとってはこれの最初の発見だったように思う。まわりの客や給仕には目もくれず、わたしはいきなり椅子をけて立ちあがると、叫んだ。「でも家なんかこわせるじゃないか？」フリオはうなずいて、わたしにすわるように請うた。「まったく正当な希望です。ひとつ、それをやろうじゃありませんか」かれは、きつと、アナキストだろう、スペインにはアナキストが多いから、わたしはこう思つて、ささやくように訊いた。「爆弾か？ 地獄の機械か？」フレニトは答えた。「あなたは――すてきな子供だ。爆弾ではひとつがいの脂肪（あぶら）ぶとりの憲兵か、まあせいぜいがんばつて、支那のさいづち頭の木偶像（おけいざう）のコレクシヨ・マニアで、テニスにうつつをぬかしてゐるそこらの王を、片輪にするくらいのもさ。いやいや、われわれがやろうというのはそんなものじゃない」わたしは訊くのは適当でないときとつて、ていねいに頭をさげて、こういうにとどめた。「わたしはあなたの弟子になりましょう、忠実な、熱心な弟子に。ただ實際を打ち明けてください、さもないと今夜か明朝あたり気が狂うかもしれません」かれはポケットから小さな海泡石のパイプをとり出して、わたしにさし出した。「上質の《伍長（カザール）》をつめて、吸いなさい――それが實際です」われわれは夕食をし、チーズのあとで二杯の《クロ・ブジョー》（アドウ酒の）を注文して、フレニトはまたわたしに、これ、つまり《クロ・ブジョー》は――真実であつて、夢では

ないと念をおした。明け方近く、《ネオ・スカンジナヴィア・アカデミー》で、透きとおつたチュチュをはいた、とけるような新鮮なバターをつけたできたてのパンのようなふっくらしたスエーデン女をわたしに紹介して、かれはいった。「これは実をいうと、あなたには善じやない」そして親しげにわたしの肩をポンとたたいた。「じゃこれで、おやすみ！ 明日また！」

＊モンバルナスのカフエ。若き日のピカソ、アポリネール、モジリアニ、レジエ、リヴェラ、エレンブルグなどボヘミアンの最後の代表者たちがたむろしていた。

第二章

師の幼年時代と青年時代

本章においてわたしは、あの《ロンドン》における出会いの記念すべき夜までのフリオ・フレニトの生活について、すこし断片的にふれてみたいと思う。師はときどき若いころのエピソードを思いつくままにわたしに語ってくれた。それでわたしは、フレニトが架空の人でも、おとぎばなしのヒーローでもなく、グアナフアタ出の精糖業者ペドロ・ルイス・フレニトの息子であることを、みなさんに信じてもらうため

に、それをここに再現してみようと思うのである。

師の出生についてはさまざまなばかげた伝説が流布されていた。もっともひんばんにわたしが耳にすることになったのは、このよくうごく、しかも時間を停止させるふしぎな力をもつ目をもっている長身瘦軀の男は、仏陀の化身であるという物語である。この伝説の動機となったのは、つぎのような、それ自体は無意味なできごとであった。一八八八年の三月のある日、中央インドのアラハバダの町で、学者たちが紀元三世紀か四世紀ごろの作としている貴重な仏像が、ある寺院から消失した。明らかにこれは、番人が居眠りをしていたのと、ある英国の官吏たちが東洋の古代に強い興味をもっていたという、二つの事実の結果起こったことであった。二十五年後に神智学者たちのあいだで、仏陀はもとの肉体ですべて、メキシコ人フレニトに変形したのである、そのために従来の仏像が視力を失ったのである、という根強い説が生まれた。この伝説がまことしやかに流布されたので、あるとき師があるロシアの詩人で神智学者のしごと部屋に泊まったとき、珍奇な場面が演じられた。夜更けにシャツ一枚の詩人が眠っている師のそばへしので行って、顔をなでさぐりだしたのである。不意に現場をおそれ、このわるだくみにいくらか気がさして、かれはフレニトの額に小さなイボ——つまり仏陀の化身の典型的な特徴である第三の眼——をさぐっていたのだ、と説明した。こうしたたぐいの話は、もちろん、ま

ともに聞けるものではない。

師は一八八八年の三月二十五日に、金鉱で有名なグアナフアタというメキシコの小さな町に生まれた。かれはカトリック教の儀式にしたがって洗礼され、フリオ・マリヤ・ジェゴ・パヴロ・アンヘリーナという名をつけられた。思うに、かれは好奇心のつよいいたずらっ子だったらしい。というのは、わたしの聞いたところでは、五つのときに、生と死の相違を知ろうとして、パン切りのこぎりで子猫の頭を切ってしまったというのである。それから二年後、聖母その他いろいろのものに疑いを持ち、教会にしのびこんで、しゅろの木像に金らんをはってつくってあるマドンナの像をばらばらにしてしまい、その試みに完全に満足したというのである。

かれは十六歳のときに恋を知り、星をながめたり、永遠について考えたりするようになった。しかし、あれこれのけちなかりそめのなぐさみを体験すると、かれは星や永遠を忘れ、娘からさっさととはなれて、それっきり人びとが《恋》と呼ぶものに對する興味を失ってしまった。さいわい、娘はまもなく氣をとりなおして、ヴェラクルスからきた請負師に嫁ぐことになった。それを知ると、フレニトは生涯にたったひとりマークした女にプレゼント——十二人用の洋銀のディナー・セットを贈った。

その後かれはエリ・オロへ金鉱をさがしに出かけたが、さがしたり掘ったりして時間をつぶすのがいやで、強烈な《ば

くだん』を壺にひとつぐい飲みして、大きなナイフをひきぬき、しごとからもどってくる鉱夫たちの群れのまゝに立ち上がり、ナイフで地面に線をひいて、叫んだ。「今日からここはグアナフアタ領だ。おれに税金を払わんやつは、だれもこの境界をとおさん。金を出せ！」エリ・オロの人びとは欲は深い、憶病で、強盗の町グアナフアタの名を聞いただけで、生命さえたすかるなら、なんでもなげ出す氣になった。一時間後にフレニトは金の囊をかついで森深い山中に分け入っていた。かれはインデアンから馬を買って、無事に合衆国の国境に着いた。この話をわたしは、フレニトとわたしの共通の友人である画家のディエゴ・リヴェラ(メキシコ出身の有名な画家。フレニトのモデルである)から聞いたのである。かれはこの記念すべき日にエリ・オロの町にいて、砂の上にきざまれた線や、おびえた鉱夫たちや、フレニトの革ベルトのついたつばの広い帽子に入れられた金塊を目撃したのである。

合衆国南部のある州で、師はこの金塊を八千ドルで売り、その金の浪費にとりかかった。かれはそのために行き会ふ黒人たちに片っ端からジンをふるまったり、珍しい切手を買いたせたり、もっとも自由な新聞に自分をほめあげる論文を書かせ、ダマスクからきたいかがわしい若者たちの肖像をのせさせたりした。こうしてかれは、むりやり六千ドルは費消することができたが、まだ二千のこつていた。そこでかれは金持ちだがけちな町の商人たちを盛大な晩餐会に招いて、食

後、高級葉巻き『ラ・コロナ』をみんなにくばり、マッチをすらすらに吸いつけることができるように、百ドル紙幣を何枚もまるめて火をつけた。商人たちは膝でござをいまして、軽い銀色の灰をあつめた。かれらの胃の調子は文句なく破壊された。その代わりフレニトは金をつかうといううんざりしたしごとから解放されたのである。

フレニトはまたメキシコへもどって、革命をやろうと決意した。若い共和国の変動の時代だった。フレニトはあらゆる党の中からサパタ(メキシコの革命家。一八七七年—一九一八年)とその素朴な一味を選んだ。都市文化、精糖工場の機械、蒸気機関車、死の商人、金、梅毒を憎悪する徒党だった。カルランサが裏切つてサパタを殺し、フレニトをおびき出した。フリオは偶然に助かった。死を待つ間、かれは詩人たちにうたわれる嚴肅さのかわりに、ひどい退屈と眠氣を感じた。そしてこの体験の後は、もう無造作に日常茶飯のように人を殺した。かれは有名なセライ付近の戦場でインデアンの部隊を指揮し、武勲にかがやくウィルビー軍を粉砕した。かれの勇氣、機略、才能はメキシコ共和国大統領オブレゴンを感激させた。しかし政権を転覆したり、銃殺したり、敵を追跡したりすることも、単調で退屈なことであることがわかった。第七革命後フレニトは顕微鏡と、製図用具と、本を四箱買いこんで、さまざまな學術研究に没頭した。その後まもなくかれはリマとブエノス・アイレスを訪れ、ニュー・ヨークに居を移した。